

〔東京桑野会〕

東京桑野会雑感

芳賀 雅美

(八十六期)



安積高校を卒業してから45年が経過した。今や一線を退き、アルバイト程度の非常勤の仕事と年金で暮らしている。もっぱらの生業はこの9月で2歳になったばかりの孫の遊び相手である。活発な男児で、外で一緒になって遊んでいると無茶ぶりで流血事件を起こし、母親であるわが娘に叱られている。

思い起こせば同級生から誘われて初めて東京桑野会に参加したのは、ちょうど母校創立百周年記念の年であった。年齢的にはまだ30歳になる直前で、東京本社勤務になって間もなくでもあり、仕事にも子育てにも半人前で余裕はなく、あまり関わる事ができずにそれっきりの参加であった。その後山口県徳山市(現周南市)への転勤もあつたりし、長い期間東京桑野会への

関係を中断していた。再度東京本社に転勤となり、さらに40歳代半ばになって仕事にも生活にも余裕が生まれ、毎年総会に参加できるようになった。

祖父母や両親はずいぶん前に他界し、兄弟姉妹四人とも故郷を離れ首都圏や近畿圏に生活拠点を移した。もはや「ふるさと」と呼べる家はない。本籍地も福島県から移動してしまった。郡山には叔母や従兄弟姉妹たちといった親戚しか残っておらず、申し訳ないと思いつつもそこは縁遠い場所になってしまった。しかしながら40歳代になって、長い間訪れていなかった母校に四半世紀ぶりに立ち寄る機会があり、今や安積歴史博物館となった旧本館を一目見て、一瞬にしてタイムスリップしたのだ。「本館のあの二階の角の教室で勉強したんだ。」という思い出と、自分を育ててくれたこの地への郷愁に涙したのをはっきりと憶えている。安積高校には恩返しをしなければならぬと強く感じた瞬間でもあった。

私のできる範囲で安積に恩返しできるものはないかと考え、東京桑野会の活動に積極的に参加し始めたのは平成14年(2002年)の総会

後からであった。そう、桑野会報でも過去紹介された、平成14年5月24日に目白駅前の居酒屋で勃発した「いわしや事件」が発端である。(詳しくは当桑野会報37号と38号を参照。)公式ホームページの開設への活動である。

斉藤英彦幹事長(当時)・現会長代行(六十九期)と櫻井淳広報部長(当時)・現副会長(七十八期)の強力なバックアップの下、若手を集めて知恵を出し合い、私の得意分野を発揮



総会で挨拶する古川清会長



特別講演する本田宏医師（86期）

することができた。翌年3月のホームページランドオープンから15年半経過した現在も、無事に運営することができていることはたいへん喜ばしい。

本年6月8日金曜日、目白のホテル椿山荘東京にて、平成30年度の東京桑野会定期総会と懇親会が開催された。郡山からのご来賓として、母校校長の渡辺昇氏（九十期）、校内幹事の染谷伸宣氏（百五期）、安積桑野会会長の安孫

子健一氏（八十期）、安積歴史博物館の橋本文典氏（八十四期）の四名をお迎えし、学生会員十名と一般会員百十名の、合わせて百二十四名が集まった。総会では冒頭、古川清会長（六十三期）による挨拶があり、総会・懇親会の参加

人数の減少と、年会費納付者の減少を危惧する旨の話や、火の車の台所事情を改善すべく対策として工夫に工夫を重ね、当会の近未来的な開拓を突き進める強い意志の表明があった。また本年は会長改選の年であり、総会議長の浅川章副会長（七十六期）の発声で候補者指名を促したところ、会員より古川清会長の統投を推挙され、満場一致で可決された。今回の任期を全うすると、会長在任20年となり、戦後復興後の会長職の最長記録を更新することとなる。ちなみに2番手は前会長の澤田悌氏（四十二期）の16年となっている。

総会後の懇親会に入る前に、恒例により会員の特別講演会があった。講師はNPO法人医療制度研究会副理事長で医師の本田宏氏（八十六期）、演題は「外科医36年を顧みて」である。今や社会問題となっている、医師の過剰労働問

題や医療制度の欠陥を指摘し、改革の必要性を熱く語った。このままでは崩壊への道を突き進むであろう高齢者の社会保障制度や医療制度に対し、特に関心が高い会員諸兄には大いに役立つ内容であった。

引き続きお待ちかねの懇親会である。開宴一番に斉藤英彦会長代行の挨拶後、来賓の学校長と安積桑野会会長のご挨拶を賜った。出席者中最高齢の長尾壮七氏（六十一期）による乾杯の音頭で楽しい宴がスタートした。椿山荘のおいしい料理と飲み放題のアルコール、グラスを片手に旧友たちを回り再会を喜びあい、また世代を超えての懇親に旧交を温めあった。若手会員の自己紹介があり、おじさんたちにはまぶしい女子会員の話を聞き、「私はミス芝浦工大2017に選ばれました」という電子工学科2年生の女子も現れ、隔絶の感を得たのは私だけではない。あるまい。心臓ヨガなる初耳の施術を会員女性セラピストの指導の下全員参加で実施し、さらに校歌や紫の旗ゆく所を心置きなく大合唱した。瞬く間に予定の2時間が過ぎ、来年の再会を誓って、三々五々とグループに分かれて二次会へと



総会後の懇親会で、自己紹介する若手会員

移動していった。いつものことであるが、目白駅前の居酒屋では、例年同様の福島弁が飛び交う宴会が続いていたであろう。

さて本年は母校創立百三十四年である。また安積の誇る大先輩、朝河貫一博士没後70年の年でもあり、早稲田大学大隈講堂や郡山市民文化



今年も絶好調、大矢真弘応援團長（88期）

センターにおいて、記念シンポジウムが開催された。この秋にも続きの記念講演会があると言う。参加された会員の方も多いと思うが、朝河貫一が目指した『知』の理想を検証し、今後我々が目指すべき指針を考える良いチャンスとなったと思う。今一度彼の著書（現代文で読む）日本の禍機」を精読したい。安積歴史博物館に

て販売しているとのこと、会員の皆様にはぜひお買い求め願いたい。（この部分は、橋本文典氏からのお願ひ。）

安積開校からの歴史はとても長い。そして明治26年（1893年）11月5日に「東京・向島洋酒店すみや」にて福島県尋常中学校茶話会が開催されてから125年、東京桑野会の歴史も同様に長いのである。昨年5月、東京桑野会会則の第2条に、当会の設立日を先の如く記載した。会員諸兄にはこの重みをぜひ感じていただきたい。また総会冒頭の古川会長挨拶の中で、東京桑野会の活動について『近未来的な開拓を突き進める強い意志』の表明があったが、総会や懇親会、会報の発行に限定されず多くの会員が参加できるようなイベントを、ぜひとも具現化しなければならぬ。事務局および広報部会を中心にして知恵を絞り、具体的な行動計画を立案したい。

長くなってしまったが、今後百五十年いや二百年への歴史を刻み、安積桑野会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を祈念し、本稿を終えることにしたい。